『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』
第４巻第１号　2020（pp.199 - 214）

【研究ノート】

明治期における「単語図」の文化的変容
―日本体育大学図書館所蔵の「おもちゃ絵」を中心に―

府川　源一郎（日本体育大学）

明治期の学校教育の入門期では,「単語図」を使った学習指導が行われていた。この「単語図」は，アメリカの言語教育で使用された School and Family Charts をもとに，文部省が日本に適応するように改変したものである。一方，民間からも様々な単語図が印刷，刊行されて，学校教育以外の場に出回った。こうした印刷物は「おもちゃ絵」，と呼ばれている。本稿では，日本体育大学図書館に所蔵されている「おもちゃ絵」のうち,「単語図」に関係したものを選んで，その特徴を分析した。

キーワード：単語図，おもちゃ絵，子ども文化史

Cultural Transformation of "Tango-zu(Word Charts）" in the Meiji Period
—Centering on "Omotya-e" in the Library of Nippon Sport Science University—

Genichiro Fukawa (Nippon Sport Science University)

In school education in the early Meiji period, learning instruction using "Tango-zu(Word Charts）" was offered. This "Tango-zu" was modified by the Ministry of Education (Monbu-sho) to adapt to Japan based on the School and Family Characters used in American language education. On the other hand, various word diagrams were printed and published from the private sector, and it went out to the place other than the school education. These printed materials are called "Omotya-e" In this paper, we select the "Omotya-e" in the Library of Nippon Sport Science University and analyze its characteristics by selecting the one related to "Tango-zu".

Key Words: Tango-zu(Word Charts), Omotya-e, Children's Cultural History

1. はじめに

明治期には，教育用の子ども向けの木版の刷り物が大量に出回っていた。一般にそれらは「おもちゃ絵」と呼ばれる。その内容は，学校教育に関わるもの，日常生活に関わるもの，時事的なものなど多岐にわたる。その中には師範学校や文部省から刊行されて，正式に学校教育の中に位置づけられた掛図を題材にしたものもある。また，それを民間業者が模倣したり改変したりして，子どもたちの入手しやすい価格で，絵双紙屋などで販売していた刷り物もある。これらの印刷物は，近代学校教育を側面から推進する教材でもあり，また，家庭遊びの材料として学校教育を支える存在でもあった。しかし現在それらは，必ずしも整った形で整理保管されているわけではなく，その研究も十分に進展しているとは言い難い。[1)]

稿者は，これまで科学研究費などの助けを借りて「明治期の教科書と子ども読み物」の研究を進めてきた。そのうち明治期の教科書研究に関しては一定の成果を上げることができたと考える。[2)]

一方，子ども読みものに関しては，現物資料の収集およびその一部の紹介という範囲にとどまっている。幸いなことに，収集した子ども読み物関係資料（子ども向け木版刷り物を含む）のほとんどを日本体育大学図書館に受け入れていただき，2019 年度には「日本体育大学学術研究補助費」を受けることができた。そこで，これらの資料のうち，まずは，子ども向けの木版刷り物（約 230 枚）の整理と分析を進めることにした。

2. 明治初期の言語教育関係の刷り物

周知のように日本近代の教育は，欧米文化の圧倒的な影響のもとに展開された。それは 1872（明治 5）年の「小学教則」に示された教科書類の多くが欧米の翻訳書で占められていたことからも明らかである。明治初期の教育には，西欧の教育文化が急激にまた大量に持ち込まれたのだ。

とはいえ日本では，既に江戸期に独自の教育システムが高度な発達を遂げていた。読み書きの教育に限っても，武士や一部の町人たちは漢文中心のリテラシーに通暁していたし，商人たちは変体仮名による実用的リテラシーをかなりの程度習得していた。それを支えたのが，木版印刷による出版活動だったこともよく知られている。教育用の印刷物としては，武士階級が藩校などで使用した「四書五経」などの漢籍が上梓され，また庶民階級が寺子屋などで使用した「実語教」「童子教」や各種の往来物が数多く刊行された。さらに娯楽用には，「読本（よみほん）」「草双紙」「合巻」，あるいは浮世絵などの木版印刷物が広く流通した。

このような文化的土壌の上に，国民皆学を標榜した近代学校教育が展開されたのである。したがって，知識人たちが主導して移入した西欧言語文化は，そのままの形で人々の中に届けられたわけではない。そこでは，在来の文化と新着の文化とがせめぎ合い，反発し合い，また融合し合うダイナミックな動きが，各階層・各地域に渡って繰り広げられたのである。それは，在来の文化のバイアスを受けてゆがめられたり，また思いがけずより豊かに受けとめられたりもした。

言うまでもなく言語教育における入門期用学習教材に関しても，同様の事態が起こった。以下では，そうした様相が典型的に観察される言語教育関係の刷り物，とりわけ「単語図」において，彼我の文化の交流がどのように展開されたのか，あるいは庶民がそれをどのように受けとめたのかを，いくつかの図版資料を基に検討していく。

3. アメリカのチャート

明治初期の入門期教育では，「掛図」の使用が奨励された。掛図は，一斉授業における中心的な教具であり，学習者との「問答」というコミュニケーション活動を伴う。文部省・師範学校は，自ら掛図を作製して，それを全国に頒布した。この日本の官版掛図のもとになったと考えられるものが，1862 年にニューヨークのハーパー＆ブラザーズ社から出版された *School and Family Charts* である。このチャートは，現在日本の内閣文庫に保管されており，ネット上で画像の公開がなされている。[3)]

School and Family Charts は，Marcius Willson と N. A. Calkins の二人によって作成されたものである。ウィルソンは，田中義廉が『小学読本』の原拠にしたウィルソンリーダーの編者として，またカルキンは，『加爾均氏庶物指教』の著者として，それぞれ明治初期の日本の教育に大きな貢献をしたことは周知の通りである。

チャートの体裁は，裏表 11 枚，1～22 図の構成で，活版印刷。一枚の大きさは 92×122 ㎝であり，日本の学校などで使われるいわゆる模造紙（788×1091mm）よりもひとまわりか，ふたまわりほど大きい。日本では，このチャートをもとにした各種の官版掛図が，木板彫刻で和紙に印刷されて，言語教育，美術，数学，植物学，博物学などの初歩の教授材料として活用された。

この *School and Family Charts* のうち言語教育関係の内容は 1～9 図までである。次に，それぞれの図の英語の表題と，カッコの中に（誌面構成／取り上げられている内容），の順に示す。なお，図版【図 1】には，No.1. Familiar objects represented by words and pictures. を掲げた。

1. Elementary: Familiar objects represented by words and pictures.（絵と単語／母音の発音と綴り）
2. Reading: First Lessons.（絵と単語／連語）
3. Reading: Second Lessons.（文字のみ／文）
4. Reading: Third Lessons.（絵と文／対話）
5. Reading: Fourth Lessons.（絵と文／長めの対話）
6. Reading: Fifth Lessons.（絵と文／長めの対話）
7. Elementary Sounds.（文字のみ／発音記号）
8. Phonic Spelling.　（文字のみ／発音記号）
9. Writing.（絵と文字／筆記体）

1～9 図は，単語や連語から，文の学習へと展開していく。それぞれ，単語や文の指し示す内容や状況を，できる限り一枚の絵と対応させて示そうとしている。また，1～9 のどの図からも音声指導を強く意識していることが感じられる。それは，

図 1 *School and Family Charts*　No.1

類似の発音をグループ化したり，それぞれを対比して差異を確認したりするような教材構成に明確に表れている。さらに問答形式の対話には，イントネーションを示す記号まで付いている。

つまり，このチャートによる入門期言語教育（1～9 図）では，以下の二点が教授の中心になっているのである。一つは，文字記号と発音発声などの「音声」と文字との対応の関係，あるいは筆記体・ブロック体などの「書記体系」に注意させようとする学習，すなわち「記号形式への着目」という側面である。もう一つは，単語や文とそれが指し示す内容や状況とを結びつけて，その内容や状況について知識を深める「Object Lesson(庶物指教)」の側面である。あらためて確認するまでもなく言語教育の鉄則は，言語形式と言語内容との両側面に目を配ることである。したがって，このチャートもその原則に順って，「記号形式（言語形式）」と「庶物指教（言語内容）」とを同時に学ぶための教材を並べている。

さらに，第 1 図で登場した数々の単語が，それ

に続く「連語」や「文」や「対話」の教材の中にも繰り返し登場する。これは，既習事項をもとにして学習範囲を広げていくという発想である。すなわち学習の順序性に注意が払われているのであり，これもこのチャートの大きな特徴である。

4. 官版掛図の「単語図」

一方，日本の文部省・師範学校は，アメリカのチャートのどのような点に学んで，官版の掛図を作ったのか。1873（明治 6）年 5 月に作製された官版掛図の冒頭は，文字指導から始まっている。片仮名と平仮名の五十音図，算用数字（加法・乗法）などに触れた後，「単語図」が登場し，その後に「連語図」が続く。言語にかかわる教材はここまでで，あとは「形線度図」「形及体図」へと展開する。また，この「単語図」とは別に，日本版の「植物図」「動物図」も作られている。これらは *School and Family Charts* の 10 図以降の内容を模倣したものであり，事物を並べてその分類や名称を教えるというスタイルが見事に移入されている。このことから，明治初期の官版掛図は基本的にほとんど *School and Family Charts* に倣って作られたものであることが確認できる。

もっとも，入門期の言語教育で使用した日本の「単語図」や「連語図」は，一見するとアメリカのチャートと同じように見えるが，彼我の言語構造や教育目的の相違を反映せざるをえない。ここでは，その懸隔の様相を「単語図」に限定して見て行くことにする。[4)]

まず，日本の「単語図」の「第一単語図」（【図 2】）を見てみよう。[4)]

「第一単語図」には，「イ」と「キ」，「エ」と「ヱ」が語頭にくる 12 単語の漢字と絵，また「イ」と「ヒ」と「キ」，「エ」と「ヘ」と「ヱ」が語尾につく 18 単語の漢字と絵とが示されている。

単語の絵が描かれていて，そこに文字が添えてあるのは，アメリカの掛図と同じである。しかし，付載された文字は「錨」や「蝾螈」などかなり難解な漢字も採用されている。このような難しい漢字がなぜ初等教育の冒頭に登場してくるのか。

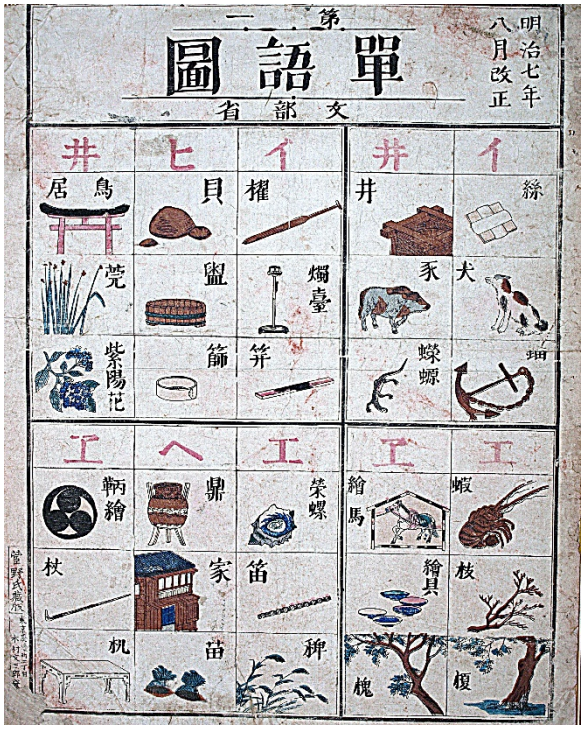

図 2 「単語図」菅野氏蔵版

日本語の一般的な表記用の文字には，片仮名，平仮名，漢字の三通りがあり，それらを混在させて使うことが多い。したがって，それらの文字の習得が日本の文字教育の目的になるのは言うまでもないことだが，どのような順番でそれを教えるのかが大きな問題になる。

官版掛図では，最初に五十音図を使って，平仮名と片仮名の文字学習を済ませる。文字と発音とを機械的に教えるような学習になる可能性が大きいが，とりあえずは一文字ずつの平仮名と片仮名を読めるようにすることが想定されている。その次の段階で，「単語」の学習に入る。

そうだとするなら「単語図」の絵のそばに「いと」や「ゐど」，あるいは「イト」や「キド」などの既習の仮名文字が添えられていても良いはずではないか。そういう構成にしなかったのは，おそらく「絲」や「井」という漢字の役割が，「糸」のコマに書かれている「絵」が「糸の図だ」ということを示すところにあったからだと考えられる。つまり，イモリの絵に付された「蝾螈」という難解な漢字は，もっぱらそこに描かれた両生類の生きものが「イモリ」なのか「ヤモリ」なのか「サンショウウオ」なのかを分別し，特定する目

的で記されていたのであり，その漢字自体を記憶したり，正しい書き順で書いたりすることをねらっているわけではなかったのだ。たぶん誰にとっても，「単語図」第一の右下に描かれている「榎（えのき）」と「槐（ゑんじゅ）」の絵を見て，どちらが「榎」でどちらが「槐」であるかを判別するのは至難の業であろう。

現実の教場では，次のように指導が展開する。すなわち，教師が「単語図」の当該のコマの中の「i-to」の絵を指示棒などで指して，「これは何か」と問い，生徒が「それは i-to です」と音声で答える。（ここでは音声は仮にローマ字によって書き表す。）つまり，生徒たちは「i-to」の絵を見て，日常生活の中で使用している「i-to」の実物を想起し，その絵が「i-to」を指し示していることを確認するのである。重要なのは，それらがすべて音声によるコミュニケーションによって行われることである。

その後，教師が「糸ハ何を製して成るものか」（もちろんこれも音声による。）などの「問」を出し，生徒は「糸は蠶又ハ綿麻にて製し人の着物に織る物なり」のような「答」を展開することが想定されている。「単語図」はそうした音声による「問答」を行うための教材であり，そこに記された漢字を生徒が読めるかどうかは一義的な問題ではない。別の言い方をするなら，この難解な漢字表記は，生徒にそれを直接指導する対象ではなくて，「単語図」を使う指導者向けの注記のような存在なのである。

今述べたことを，アメリカのチャートの第一図と比べてみよう。英語では，同じ［a］という文字が使用されていても，c<u>a</u>t，f<u>a</u>ce，cl<u>a</u>w のそれぞれの単語の中での発音は異なる。それゆえ，英語の文字学習では，生活の中によく出て来る身近な単語を取り上げて，発音と文字との関係を何度も反復して記憶させる必要がある。英語では，発音とそれを表記する文字との間に，かなりの乖離が存在する場合があるからである。

これに対して，日本語では，発音と仮名文字とは，ほぼ一対一の対応関係を持っている。したがって，平仮名（片仮名）さえ覚えれば，仮名のみで表記された文字や単語を「読む」のは，それほど難しいことではない。

ただし，いくつか特別な例がある。それはこの官版掛図の「第一単語図」が取り上げているような場合である。すなわち，「絲（i-to）」と「井戸（i-do）」の「i」は，発音としては同一音であるが，仮名文字表記をする際には，いわゆる「歴史的仮名遣い」に則って，「ゐと・イト」や「ゐど・ヰド」と記す必要がある。それを教材化したのが，「単語図」第一と第二なのだ。したがって，生徒はそれぞれの単語の絵に添えられた漢字を読んだり書いたりする必要はない。先ほど稿者が「指導者向けの注記」と述べたのは，こうした意味においてである。だが，指導者の側が教材の作成意図を十分に理解していなかった場合には，この「単語図」を使って，難解な漢字の指導が行われかねない。[5)]

この後に続く官版掛図の第三「単語図」から第八「単語図」までは，文字表記にかかわる教材ではなく，意味分類ごとに単語がまとめられた教材が並ぶ。すなわち植物，日用雑器，衣服，虫類，鳥類，動物など題材別に分類された単語の絵と，その名称が漢字で示されていくのである。こうした意味分類によるグループ分けは，日本でも「和漢三才図会」の「部立て」や，木板版画の「もの尽くし」などで，一般にも馴染みが深い。もちろんこれらは，「庶物指教（Object Lesson）」の考え方とも通じており，語彙の拡充と同時にそれらの語彙がどのような概念の範疇に属するのかを学習する場になる。

もっとも，アメリカのチャートで注目すべきことは，第１図に登場した Cap や Cat などの単語が，それに続く第２図以下の連語や文のチャートの中にもくり返し反復して登場していることである。その背後にあるのは，既習の学習事項を反復しながら徐々に学習範囲を広げて，学習のステップアップを図ろうとする意図だった。ところが，日本の官版「単語図」には，そうした工夫は見られない。すなわち，「絲」「井」「犬」「豕」な

ど第一「単語図」にいったん出てきた単語は，この後の「単語図」の中には，いっさい登場しない。官版単語図には，多くの単語が登場するが，それらは提示された範囲の中で完結しており，相互の連絡がまったくない。すなわちアメリカのチャートのように，学習の順序性や段階性を確保しつつ，言語活動の中では反復を繰り返して単語の定着を図るといった教育技法に関しては，十分に摂取することはできなかったということになる。

なお，官版「単語図」は，掛図形態だけではなく，それらを縮小印刷して整理した冊子形態の印刷物としても普及した。それが文部省編の『小学教授書』であり『小学入門（甲号）』『小学入門（乙号）』である。民間からも同内容の書物が多数刊行され，中には教室で指導すべき問答の想定内容を収録しているものもあった。また，豆本のような大きさの玩具的な冊子も刊行されており，これらは学校以外の場で使われたのではないかと思われる。一般に「掛図」は，大きさや形態の点で保守管理が面倒なこともあって，現在全国各地に残されている「単語図」に関する資料は数が少ない。それよりもそれを縮小して冊子形態にまとめた印刷物の方が，圧倒的に保管数が多い。

5. おもちゃ絵への展開

新しい近代学校で登場した教材教具類や一斉指導による学習指導の方法は，江戸時代のそれとは大きく異なっていた。明治の庶民たちは，赤煉瓦の建物や鉄道の開業などと並んで，そうした近代学校の教育内容や生徒たちの通学風景にも好奇の目を向けた。とりわけ本稿で取り上げている「単語図」は，従来の藩校や寺子屋には存在しなかった教材だけに，一般には「文明開化」を象徴的に体現する教材の一つだと認識されていたようだ。そこで，それを縮小印刷した「おもちゃ絵」が登場したり，「単語図」を使った教授風景などが錦絵の題材になって販売されたりしたのである。

たとえば，【図 3】のおもちゃ絵は竹内栄久（三代目・歌川国貞）の作品で，第一から第四までの「単語図」が，一枚刷りになっている。全体の大きさは一般的な奉書（中判）版であるが，一コマ一コマの図柄のサイズがきわめて小さいので，絵も簡略化されている。しかし，官版「単語図」と同様に，漢字も添えられているので，官版の忠実な縮小版だといえるだろう。「おもちゃ絵」という名称の通り，子どもたちがつい手を出しそうな玩具的な出来上がりである。これはそのままの形で鑑賞の対象になった可能性もあるが，おそらくバラバラに切り離してカードのようにしたり，あるいは糸でかがって小冊子を作ったりしたのではないかと想像される。

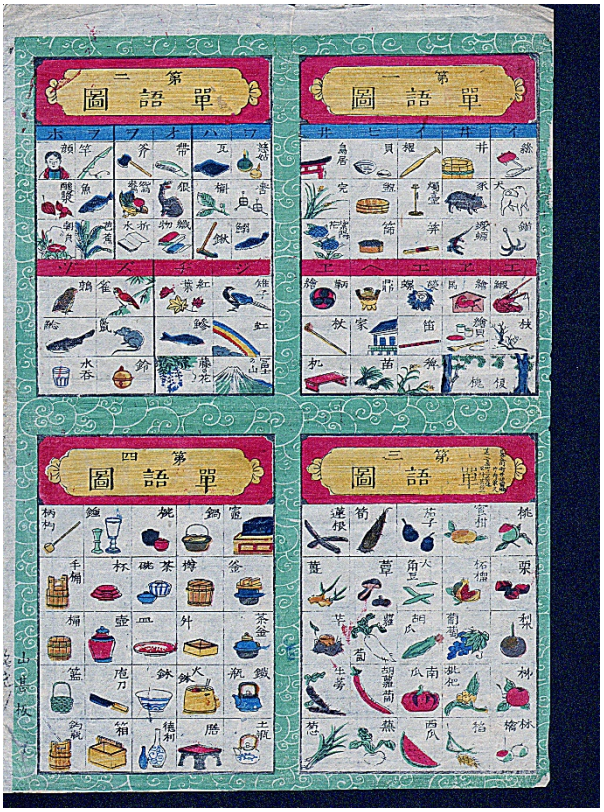

図 3　おもちゃ絵「単語図」

一方，子どもたちが自分自身で一枚絵を切り取って小冊子を作らなくとも，初めから，「豆本」仕立てになっている「単語図」も販売されていた。そうした資料のうち，ここでは『単語篇童画解』（たんごへんわらべえとき）という題名の豆本の一部を紹介しておこう。ここに掲げた【図 4】の図版は，右面が表紙の裏の「見返し」部分であり，地球儀のような図が描かれている。また，左面に「単語図第一」が木版で色鮮やかに色刷り印刷されている。版元は，大阪の梅村為助である。

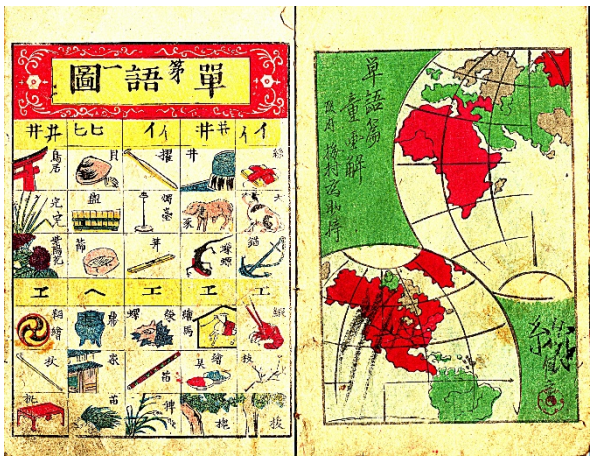

図 4　『単語篇童画解』単語図

左面の地球儀の絵を見ると，右下に「絲」という字が手書きで墨書されている。ここからも分かるように，こうした小冊子類は必ずしも子どもたちから丁重に扱われたわけではなく，悪戯書きされたり破れ取られて表紙が無くなったりしたものも多い。だが，それはこうした小さな印刷物が，軽んじられたり疎まれたりした痕跡だというより，逆に親しみやすさや愛着を持って取り扱われた証拠だと考えた方がいいだろう。少々手荒にも見えるそうした子どもたちの行動の中にこそ，学校教育とは異なる学習意識と興味関心とが立ち現れているのである。

6.「単語図」を使う教室風景

ここまであげてきた官版掛図の直接模倣というべき「単語図」とは異なり，掛図を教授する教師と生徒の姿まで描き込んだおもちゃ絵もある。

ここに掲げた「改正単語之図」（【図 5】）は，九コマが一枚刷りに収められていて，一コマの大きさは新書本の半分くらいと，かなり小さい。

「単語図」の内容は，ここまで見てきたものと同様に，明治 7 年 8 月に改正された文部省版の縮小版で，各コマも原図の通りに配置されている。しかし，掛図の一部と教授者の姿とが重なっているので，ここから掛図の情報すべてを読みとることはできない。したがって，このおもちゃ絵を「単語図」の縮小版として，そのまま家庭学習用に使用することは困難だろう。

図 5　おもちゃ絵「改正単語之図」

また，このおもちゃ絵では女教師の前には女子の生徒，男性教師の前には男子の生徒が袴を着けて整列している。小学校は，男女別のクラス編成だったことが確認できる。

さらに「童蒙教授図会」という名称のおもちゃ絵にも教師の姿が描かれている。（【図 6】）指示棒を使って指導している教員と長椅子に腰掛けた生徒の姿が，実物より大きくデフォルメされた「単語図第三」の前に配置されている。

このおもちゃ絵の「単語図」には，振り仮名が付けられている。この例のように，文部省・師範学校が刊行した『単語篇』や『小学読本』などの初学者用の冊子体の言語教材類に，民間業者が勝手に振り仮名をつけたり注解を施したり，逸脱行為を加えて販売する例も多く見られる。すなわち，「仮名附単語篇」や「傍訓小学読本」あるいは「注解小学入門」などの書名を持った民間本が，当時，盛んに刊行されていたのである。

そうした行為は学習者に教育内容を理解しやす

図 6　おもちゃ絵「童蒙教授図会」

くしようという目的で行われたのかもしれない。しかし一方でそれは，商業的な利益を得る目的による情報添加の意味もあっただろう。類似の事例が増加してくると，本家本元の作成者である文部省も，そうした民間本の規制に乗り出す仕儀に至る。果たして，1879（明治 12）年 2 月には，文部省出板の図書への注解や傍訓，あるいは本文を増減した書物を刊行することは禁じられてしまう。

ところで，この「童蒙教授図会」は，ここまで見てきたおもちゃ絵と比べると，細部まで詳細に描き込まれており，人物描写にも高いリアリティーが感じられる。おそらく，技量の優れた絵師が手がけたのであろう。実際，この絵の版元は，浮世絵制作で著名な日本橋の万屋孫兵衛である。とするなら，この絵は子ども購買者を対象にした消費財というより，大人の観賞を視野に入れて作成されていた可能性が高い。そうでないとしても，教師が描き込まれている図版は，単なる「単語図」の縮小版ではなく，教室風俗を図像によって世間に紹介するという側面を強く持っていた。

同じように，教室の様子を仮想的に描いたおもちゃ絵に肉亭夏良（にくていなつら）による「児学教導単語之図」（【図 7】）がある。ここに取り上げられている単語図は「単語図第五」である。図に添えられた漢字は，基本的に明治 7 年 8 月に改正された文部省の改正前の「単語図」に拠っているものの，「雪駄」だけは明治 6 年の「単語図」に拠っている。また，官版の「単語図」では，すべて「團扇」となっている漢字表記を「團子」としている。つまり，官版の「単語図」をそのまま写したわけではなく，私の裁量で改変しているのである。小さな改竄かもしれないが，これが先ほど述べた官版の教材類からの逸脱の例である。

また，この「児学教導単語之図」には，「本→もろもろのはなしあり」，「筆→しょえをかく」などの「庶物指教」にも通じるコメントが赤刷りで記されている。おそらく教室で行われる「問答」

図 7　おもちゃ絵「児学教導単語之図」

を想定した文言のつもりなのだろう。こうした記述があることによって，この図版の鑑賞者には，近代学校教育がどのように行われているのかを想像することができる。言うまでもなく，もとの「単語図」にこうした注解は一切付されてはいないので，この刷り物を購入した子どもへのサービスのつもりなのかもしれない。

もちろん「おもちゃ絵」の目的は，官版の「単語図」を正確に紹介することだけではない。「おもちゃ絵」は，学校教育とつかず離れずして，ゆとりや遊びの世界を創り出しながら，学校教育の外側に存在していた。民間の玩具や教場の様子の紹介の範囲に留まっていたことによって，逆に「広義の教育性」を発揮することができたのである。そこにこそ「おもちゃ絵」の独特の立ち位置があったと言えるだろう。

図 8　「新版単語絵口合」明治 9 年

7. 世間に広がる「単語図」

「新版単語絵口合」（【図 8】）は，1876（明治 9）年 5 月に大阪心斎橋の赤志忠雅堂（明石忠七）から出板された一枚絵である。上下二枚でセットになっており，ここに示したものは，そのうちの「上」である。官版の「単語図第一」から「単語図第二」の「ヅ」の例まで 60 コマ分を対象にした「口合（地口）」作品で，大きさは中判（約 26×20cm），墨一色刷りである。[6]

それぞれのコマには，漢字で記された単語と平仮名で記された単語，それに絵が描き込まれている。それぞれの単語に付された漢字は，官版「単語図」に書かれていたものとまったく同じである。したがって，ここには「蠑螈」や「榮螺」という難解な漢字がそのまま登場している。が，そこに添えられた絵は「イモリ」や「サザエ」の図ではない。つまり「新版単語図口合」の読者が，ここに記された漢字を解読できることが前提となっているのだ。というのもこれは子どものための刷り物ではなくて，大人に向けた刷り物なのだ。

そこで当然のことながら，官版「単語図」の意図した「イとキ」「イとヒ」の仮名遣いなどの言語教育的な意図はまったく無視されており，単純にそれぞれの単語の「口合（地口）」とその絵が並べられているだけである。口合のセンスのほどは判断しがたい。しかし単色の安価な一枚刷りであることを考えれば，それほど優れたレベルのしゃれが記されているわけでもないだろう。

重要なことは，この一枚刷りが官版「単語図」を直接の材料にしている点である。しゃれは，正式な本体をからかうところに生まれる。スタンダードが人々によく知られており，またある種の権威を持っているからこそ，それを茶化してほかのものに置き換える行為が笑いを呼ぶのである。

とするなら，庶民たちの間でも，官版「単語図」は周知の存在であり，一種のスタンダードとして見られていたということになる。つまり，この「新版単語図口合」を楽しむ人々は，官版の「単語図第一」に「絲」の漢字と糸巻きの図が描かれていることをよく知っていた。だからこそ，そこに描かれた「お嬢さん（いとはん）」の図に，機知と面白さとを感じるのである。さらにいえば，当時の人々は，その「新版単語図口合」を，わざわざお金を出して購入したのである。こんなところか

漢字(ヨミ)	口合	図
絲(イト)	いと	お嬢さん
犬(イヌ)	いぬ	家を去る人物
錨(イカリ)	いざり	歩行困難な人物
井(ヰド)	きど	芝居の木戸口
豕(ヰノコ)	しごと	針仕事
蠑螈(ヰモリ)	しぼり	絞り染め
櫂(カイ)	かい	痒い（孫の手）？
燭臺(ｼｮｸﾀﾞｲ)	しょくたい	胃もたれ（食滞）
笄(カフガイ)	ほうばい	朋輩
貝(カヒ)	たい	鯛
盥(タラヒ)	あらい	洗い（湯浴み）
篩(フルヒ)	ふるぎ	古い着物

らも，逆に，官版「単語図」の盛行のほどを想像することができる。文明開化を進展させる学校教育の中身への庶民たちの関わり方の一つがここに端的に表れている，と言ってもいいだろう。

さて，また別の「小学教授」の図にも，「単語図」が登場している。それは【図 9】である。絵の中には「第四単語図」と記してあり，教室で子どもたちに男性の教員が教授活動をしている様子が取り上げられている。版画のおおよその大きさは，縦 21 ㎝・横 14 ㎝。通常のおもちゃ絵のサイズの四分の一くらいの小判である。ここでモデルとした官版の第四「単語図」には，25 の図と絵とが示されていた。しかし，この「小学教授」には，そのうちの半数の，しかも漢字を伴わない図が 12 コマ描かれているだけで，かなり省略されている。おそらくこの版画の目的は，「単語図」の内容を正確に伝えようとすることではなく，現代風俗としての小学校の様子を，図像によって手早く簡略に知らせようとするところにあったと考えられる。「漢字」が除かれているのもそのためではないだろうかと推測できる。

というのも，この版画は，いわゆる富山絵（富山売薬版画）の一枚だからである。そのことは，この「小学教授」の図版の画家の雅号「国美」から判断できる。「国美」は，幕末から明治期にかけて，富山を中心に活躍した浮世絵師の松浦守美

図 9　売薬版画「小学教授」

のことで，「売薬版画」も多く描いている。知られているように「売薬版画」は，富山の薬売りの「オマケ」として無料で配布されるもので，画題としては芝居の演目や福神などが取り上げられることが多かった。この版画は珍しく学校教育を題材として取り上げている。地方の子どもたちは，東京や大阪の子どものように，おもちゃ絵を絵双紙屋の店頭で選択して購入することはできなかった。だがその代わりに，ささやかな木版画が富山の薬売りの手によって伝播していったのである。その中に近代学校の様子が描かれていたことは，文明開化の一端が図像として提示されたことでもあった。

以上のように，初等学校の言語教育の教材として作られた「単語図」は，ここまでの広がりを持って庶民たちの間に浸透していったのである。

8. 明治中期のおもちゃ絵の単語の図

1873（明治 6）年に作られた官版「単語図」は，1879（明治 12）年 1 月になって，大きく改定され

て名称も変更された。新しい「単語図」は，「小学指教図」となり，やはり小学校の入門期用の教材として位置づけられた。この「小学指教図」も，文部省から掛図として刷行されたが，官版「単語図」の時と同様に，大判の掛図形態ではなく冊子形態によって普及した。それも現在残されているのは，ほとんどが民間から刊行された冊子である。そうした冊子形態の書物から，その一部を抜き出した。【図 10】がそれである。[7]

新しい「小学指教図」は，第一から第六までが言語教育関係の図になっている。第一は平仮名のいろは，第二は片仮名の五十音図，第三は片仮名の濁音，半濁音（次清音），併せ字，漢数字で，第四が【図 10】に示した 24 コマである。つまり，文字学習が終わって，ここで始めて「単語」が登場するのである。このように，仮名文字指導が終了した後に「単語図」が登場するという順序は，1873（明治 6）年の官版掛図と同様である。

この「単語図（小学指教図第四）」には，従来の官版単語図と同じように，図と文字によって単語が示されている。しかし，注目すべきは「小学指教図」に，漢字ではなく平仮名が書かれていることである。もっとも，そこで行われる教授活動自体は，「犬」の絵と「i-nu」という音声とをマッチングさせた後，犬についての問答を重ねる（庶物指教）というものである。これは従来の指導とそれほど変わらない。

それよりも「小学指教図」と旧来の「官版単語図」とが大きく異なるのは，単語の選定である。先述したように官版の「単語図」では，第一・第二図に，「イ」と「ヰ」，「エ」と「ヱ」などのように表記の際に留意すべき仮名遣いに関する単語が並べてあり，それ以下は，内容別に分類された単語群が並んでいた。つまり「官版単語図」は「仮名遣い→意味分類」という構成になっていて，言語教育という点から見ると，単語に関する指導は，言語形式の指導と意味内容の指導とに完全に分離されていたのである。

その点で，「小学指教図」は，言語教育としての筋がきちんと通っている。というのは，この「小学指教図第四」に収められた 24 の単語は，すべて「いろは 47 文字（清音）」を使って構成されているからである。つまり「小学指教図第一」で平仮名のいろは 47 文字をきちんと習得しておきさえすれば，この「第四」は自力で読む（書く）ことができるという趣旨である。言語学習における順序性が考慮されていることになる。アメリカのチャートの単語提出の順序性とは異なるものの，何かしらのヒントをそこから得たのかもしれない。この後，入門期の言語学習の「順序性」をどのように考えるのかという問題は，現在に到るまで議論され続ける課題になるのだが，ここではそれに深入りはしない。

図 10　「小学指教図第四」明治 12 年 1 月

繰り返すことになるが，この「小学指教図第四」は，いろは 47 文字を学習したという既有知識を使って，日常の事物を指し示す語彙を読むことが目的である。この後の「小学指教図第五」，「小学指教図第六」は，「単語図」第一でも出てきたハ行の仮名遣いや，仮名遣いに注意すべき拗音，拗長音を含む単語が，絵とともに 48 単語示されている。したがって，1879（明治 12）年の「小学指教図」の特色は，旧来の官版単語の意味別分類は無く，あくまでも平仮名表記という言語形式の指導という点で統一されているところにある。

例のようにさっそく民間でも，この「小学指教図」を材料にしたおもちゃ絵が刷り出された。【図 11】が，そうしたもののうちの一枚である。

このおもちゃ絵は「小学教授図」という題名で日本橋吉川町の堤吉兵衛が売り出したものであ

る。1879（明治 12）年に刊行された「小学指教図」の，第四・第五・第六のすべての単語を一枚の中に刷り込んでいる。おもちゃ絵の表題が「小学指教図」ではなく「小学教授図」なので，一見するとこれらの単語の出典が分かりにくいが，間違いなく「小学指教図」の中に収録された全単語を登場させて構成されている。

だが，すべての図の単語を一枚の印面に押し込んだことで，もともとの「小学指教図」が，第四図にいろは 47 文字だけを使用した単語を提示した文字指導としての工夫は消滅している。さらに，「小学指教図」の第五図，第六図の言語指導の順序性とその配慮も意味がなくなってしまい，単にたくさんの単語を並べただけの「一枚絵」になってしまった。おそらく版元にとって，学習における言語学習の原理や平仮名指導の順序性などは，視野に入らなかったのだろう。あえて言うなら，製作者側の思惑は，子ども向けにとりあえず単語がたくさん並んだ印刷物を作っておけばいいという安易な商業主義ではなかったかと思われる。

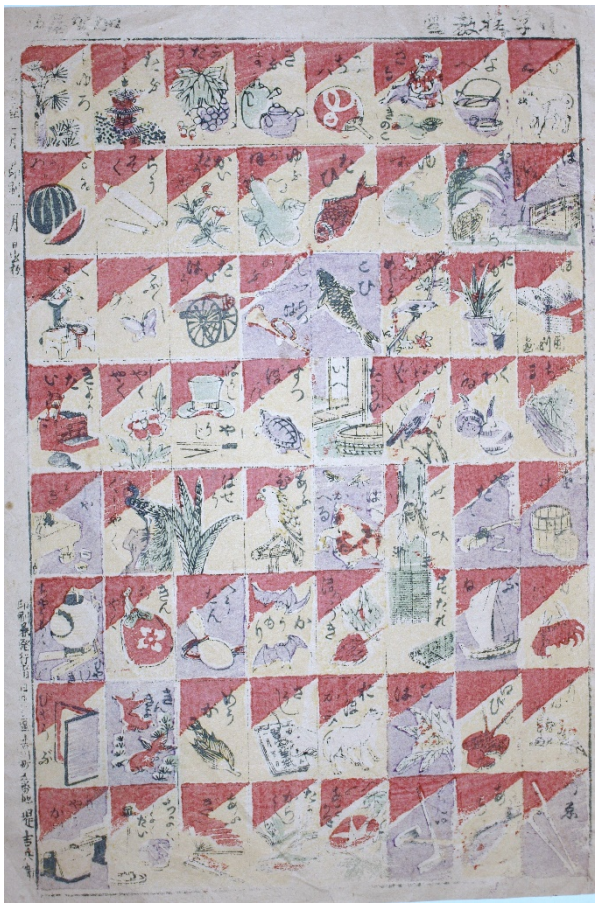

図 11　おもちゃ絵「小学教授図」

さて，最後にもう一つ，やはり単語の図が刷られた玩具的な印刷物を紹介したい（【図 12】）。1897（明治 30）年 9 月に日本橋長谷川町の地本屋である松野米次郎が発行した単語帖で，表紙には『教育単語のまなび』という題箋が貼付されている。表紙の芯地に固いボール紙が使われており，その中に折り畳まれる四面の単語の図を保護する役割も兼ねている。携帯にも便利そうだ。

この単語帖の第一図は，【図 12】で示したような単語図である。この単語図の単語は，どこから選び出してきたのか。調べてみると，出典は，東京府が 1888（明治 21）年に刊行した東京府庁編『小学読本』（文部省検定済）であり，その尋常小学校一年生の冒頭教材を取り入れて単語の図に仕立てたものだったことが判明した。[8]

次頁には，東京府庁の『小学読本』の冒頭教材を【図 13】に掲げておく。ここに示したのは，一の巻の第一課で，三ページにわたった教材である。この第一課は，片仮名の「メ」に目の絵を添えた第一コマから始まり，「トビ」に鳶の絵が添えられた 10 コマ目までの総計 10 コマによって構成されている。

この東京府庁の『小学読本』第一課に出てくる片仮名は，「メ・ン・ワ・ラ・ト・ヒ・レ・カ・ガ・ビ」の 10 文字であり，それぞれのコマの中に書かれた 10 の単語は，これらの 10 文字を組み合わせてある。つまり，「メ」を学習した後，それ

図 12　『教育単語の学び』

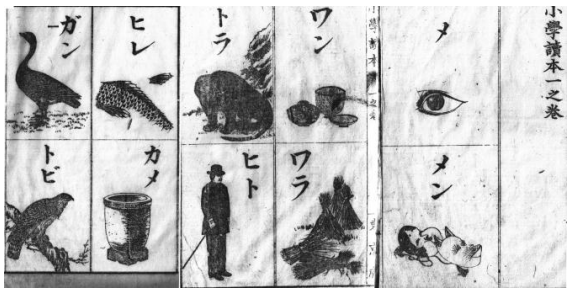

図 13　東京府庁編『小学読本』冒頭教材

にもう一文字を新しく覚えると「メン」という単語になる。さらに「ワ」の一文字を覚えれば，「ワン」という単語になる。このように，一つずつ新出文字を覚えていけば，順に新しい単語（語彙）が書けるようになっていくのである。

従来のように，文字学習を先に済ませてから「単語」の学習に入るのではなく，まず「単語」から言語学習をはじめるという方法で，ワードメソッドと呼ばれる。文字学習から学習を出発させる方法よりも，進化したものだとされている。それまでのように一文字一文字を機械的に記憶する無味乾燥な学習とは異なり，ひとまとまりの意味のある単語から言語学習を出発させようという意図をもっている。言い換えれば，言語学習の最初から単語を対象にして，その意味と文字（つまり言語が指し示す言語内容とそれを支える言語形式）を同時に学習させるべきだとする教育方法である。

この中に，先に見たアメリカのチャートの学習上の工夫，すなわち，既習の学習事項を利用しながら学習範囲を広げ，同時に学習段階のステップアップを図ろうとする工夫を，組み込んだように見える。つまりアメリカのチャートから，既習文字を一文字と，新出文字一文字を使った新しい単語を次々と提出することで，文字の獲得と語彙の獲得とを同時に行おうという工夫を学んだ可能性があるのである。

その上，東京府庁『小学読本』第一課の次の頁には，教師用の小欄が付設してあり，そこに「教授ノ注意」が小さな字で記されている。すなわち，「比目魚」「若布」「蘭」「土瓶」を生徒に読ませる練習活動をするようにとの教師向けの指示が書き込んであるのだ。ここで，はじめて教科書に漢字が登場するが，それを学習者に読ませる意図はなく，教師が判読して生徒に事物を示すためのものである。教師は，生徒たちに第一課で学習した既習の 10 文字を使って「ヒラメ」「ワカメ」「ラン」「ドビン」の片仮名の読み書きをさせ，その定着を図ることになる。つまり，この東京府庁編の『小学読本』は，教師向けの手引きをも併載した教科書だったのである。

同様な手順が，第二課，第三課と続き，すべての片仮名が提出された後になってから，あらためて既習文字を整理するために，ここで片仮名の清音，次清音，濁音の五十音図が示される。さらに教科書教材は，平仮名，連語，文へと展開していく。このように東京府庁編の『小学読本』の構成法は，いささか機械的ではあるものの，言語教育としての編成原理を明確に持っており，それに基づいて単語が提出されていたのだった。[9]

ここで，先ほどの『教育単語のまなび』【図 12】の話に戻る。『教育単語の学び』は，片仮名ではなく平仮名による表記であり，そこに漢字まで添えられていた。ここでの単語の選択が東京府庁の『小学読本』からなされたことは，両者を比べれば一目瞭然である。しかし『教育単語の学び』は，そこから単語を抜き出して，単にそれを借用しているだけにすぎない。【図 12】で示したのは『教育単語のまなび』の一頁目だけだが，先に進んで四頁目になると，『小学読本』掲載の単語だけでは，タテヨコ 20 マスを埋めることができないので，『小学読本』に提出されていない単語を恣意的に 6 コマ加えて形を整えている。したがって『教育単語のまなび』は，言語学習の順序性や段階性に腐心した東京府の『小学読本』の意図とは無関係に，そこから単語だけを借用して作られていたことになる。

実は，前述した堤吉兵衛の売り出した「小学教授図」でも同じようなことが起きていた。「小学指教図」の作成意図を踏まえれば，一コマに一単語を描かなければならないはずだが，【図 11】をよく見ると，一コマに二つの単語が書き込まれた例がいくつか見られる。こちらは，『教育単語の

まなび』とは逆で，すべての単語を誌面に収めるにはマス目の数が不足するので，いくつかの単語を適当に一コマの中に押し込んだのである。[10]

以上のような例を見てくると，民間のおもちゃ絵の「単語図」は，原拠である官版の「単語図」や「小学指教図」，あるいは『小学読本』などの背景に控えている言語教育の意図をきちんと把握した上で作成されたものではない，ということになる。確かに実態としては，「おもちゃ絵」は公的な言語教材の編成原理やその工夫を必ずしも正確に反映できていたわけではない。また，安価で提供することを優先した結果，制作材料においても制作工程においても十分な資源の投入は難しかっただろう。だがそれは，「おもちゃ絵」などの市販印刷物は公的な教材を模倣したまがい物や剽窃物に過ぎない，断罪して切り捨てるべきだということを意味するわけではない。

庶民たち（とりわけ子どもたち）は，それらの小さな印刷物から新しい文化の息吹を敏感に察知した。彼等は，なけなしの小遣いを握りしめて，それらの刷り物を絵双紙屋などの店頭で買い求め，切ったり貼ったり糸で綴じたりして，仲間たちと交流して愛玩しあった。庶民たちにとって，明治の官版教科書類は，間違いなく上からの教育政策として授けられたモノであった。しかしその背後に欧米の進んだ文化を透かし見ることができた。また，それを自分たちの生活に即してある程度確認することもできた。そこに生まれた「文明開化」に対する憧れと期待とが，多くの人々の教科書類やその類似品への興味と関心とを引き出したのである。

確かに，効果的かつ分析的な言語教育を展開するためには，言語の特性を踏まえた順序性と段階性とを持ったプログラムが必要である。だが，そのプログラムとは，言語の体系や構造を踏まえながら，同時に学習者の意欲をかき立て，それぞれの生活に実感として役に立つものでなくてはならない。つまり言語の体系や構造は，広義の教育性に支えられて，はじめて意味を持つのである。

その文脈でいうならば，「おもちゃ絵」は，それを受け入れた子どもとともに，そうした広義の教育的な環境を作りあげていた。そこに立ち上げられた独特の小さな世界は，間違いなく当時の多くの庶民たちにも共有されていた。そのことの教育的な意義は，決して小さいものではないように思われる。　　（2020.8.31.）

＊なお，本稿で使用した図版のうち日本体育大学図書館所蔵の資料を順に示す。**【図 3】**おもちゃ絵「単語図」，**【図 4】**『単語篇童画解』，**【図 5】**おもちゃ絵「改正単語之図」，**【図 6】**おもちゃ絵「童蒙教授図会」，**【図 7】**おもちゃ絵「児学教導単語之図」，**【図 8】**「新版単語絵口合」，**【図 9】**売薬版画「小学教授」，**【図 11】**おもちゃ絵「小学教授図」，**【図 12】**『教育単語の学び』。以上 9 点が，「府川源一郎文庫」に保管されている。

注

1) 教育史の観点から最も重要な基本資料は，『文部省掛図総覧』東京書籍　全 10 冊　1986 年である。また，児童文化の観点からの重要な基本資料は，『幕末・明治の絵双六』国書刊行会 2002 年，『幕末・明治豆本集成』国書刊行会 2004 年，である。

関連の論文には，美術研究の観点から，岡野素子「《文部省発行錦絵》の研究」『日本美術研究 2』2002　pp.17-31，や「明治期歌川派と教育錦絵—《文部省発行錦絵》を中心に—」『芸術学研究 8』2004　pp.167-170 がある。また，社会教育史研究の観点から，古屋貴子「明治初期の視覚メディアに関する考察：教育史における文部省発行教育用絵図の位置づけをめぐって」『生涯教育・社会教育学研究 31』2006 pp.73-82 があり，比較文化研究の立場から，何敬華「明治初期の「掛図教育」について—『単語図・『連語図』をめぐって—」『比較文化研究 85』2009　pp.39-51 がある。さらに日本語学の立場からは，大橋敦夫「明治初期出版の啓蒙的絵入単語集の語彙の諸相」『上田女子短期大学紀要 37』2014　pp.73-89，がある。

2) 府川源一郎『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究―リテラシー形成メディアの教育文化史』ひつじ書房　2014 年

*3) 内閣文庫のデジタルアーカイブの下記のアドレスで公開されている。

https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/Detail_F2006052417053155511 (2020.4.14 確認)

4) 明治 6 年 5 月に師範学校が作成した「単語図」は，明治 7 年 8 月に改正されて文部省が発行主体となった。「単語図」における，前者と後者の漢字の異同をいくつか挙げると，次のようになる。［第一］龍盤魚→蠑螈，［第三］カボチャ→南瓜，大根→蘿蔔，人参→胡蘿蔔，［第六］マントル→上衣，［第七］ズボン→短胴服，杜若→燕子花など。また，「単語図」に続く「連語図」では，改正前の文は談話体（言文一致文体に近い）で，改正後は文語体になる。こうした改変は，「単語図」の次の段階で学習することになる『小学読本』に関しても同様である。『小学読本』は，明治 6 年 3 月に四冊揃って刊行されるが，明治 7 年 8 月に，大幅に「改正」される。前者は洋学者の田中義廉が，後者は国学者の那珂通高や榊原芳野などが主導したが，「単語図」や「連語図」も同様の人物が関わっていたと考えられている。両者の違いをおおざっぱに言うなら，明治 6 年に田中義廉らの洋学者がかかわった小学校用の教材は，平易ではあるが翻訳調であり，明治 7 年の改正以降は，伝統的な文章表現に戻った，ということになる。単純化して言うと，明治 6 年に洋楽系の学者たちによって作成された翻訳調の強い言語教材群が，明治 7 年になって国学系の学者たちの手で伝統的な文体・語法によるものに修正されたということになる。この事情は，「単語図」においても同様だと考えられる。

5) 明治 5 年に文部省から刊行されたやはり入門期の「単語読方(コトバノヨミカタ)」用の言語教科書である『単語篇』には，日常的な漢字が意味分類されて並んでおり，中にはかなり難解な漢字も含まれている。また，明治 7 年 8 月にやはり文部省から，英語のスペリングの教科書に倣った『小学綴字書』が刊行されており，こちらは平仮名による単語の書取練習の教材が並んでいるが，そこに漢字も添えてある。とするなら，日本の入門期の言語教育のために最初に用意された教科書類と「単語図」との関係，およびそこで想定されていた指導の方法などの間に，必ずしも緊密な整合性があったわけではなかったということになる。

6) ここに紹介した二枚のうち，上には「四ノ九」，下には「四ノ十」という番号が振ってあるので，この「新版単語絵口合」は，大きなシリーズの中の二枚だと考えられる。

7) 佐々木邦二郎編『小学指教図読本』明治 15 年 8 月 2 日　翻刻御届け　翻刻人　松田周平（新潟県）

8) 東京府庁編『小学読本』一之巻　明治 21 年 5 月 18 日訂正印行再版　東京府御用書肆　石塚徳次郎・吉川半七・小林義則・宮川保全。

9) 官版の「単語図」や「小学指教図」は，最初に文字から指導を出発させる。これはレターメソッド（Letter Method）と呼ばれる指導法で，言語教育としては古いスタイルである。レターメソッドは，単語から指導を始めるワードメソッド（Word Method）に移行していく。東京府庁の『小学読本』や，ほぼ同時に文部省が刊行した入門期言語教科書『読書入門』は，学習のスタートを単語から開始するワードメソッドを採用していた。なお，『読書入門』は，ドイツのレーゼブッフェに教科書の編制方法を学んでいる。

10) 一コマの中に二つの単語が記されているのは，「むぎ・うづら」「さる・きのこ」「はへ・かへる」「ばうし・やうじ」「ちやうちん・ひやうしぎ」の 5 コマである。